

『帝国主義論』の方法についての一考察

——『帝国主義論』における展開と分析——

島津秀典

はじめに

本稿は、『帝国主義論』をはじめとして、「一九一四—一九一七年」のあいだにレーニンによって書かれた帝国主義に關する著作のなかでかれによつてもちいられている論理的方法について、『帝国主義論』における叙述を中心としながらそれに即して考察することを課題とする。

このような論理的方法をあとづける必要があるのは、「マルクスが『論理学』をのこさなかつたけれども、『資本論』という論理学をのこした⁽¹⁾」とするならば、レーニンも、帝国主義論体系化のための基本的な方法を「平易な概説」という制約のもとでにせよ、『帝国主義論』という論理学」をのこしているように思われるからである。

(一) В. И. Ленин, *Диалогские тетради*, Москва, 1965, стр. 301, レーニン『哲学ノート(上)』(国民文庫版)二八八ページ。

レーニン(1)は、まずなによりも、直接的には、「最初の全世界的な帝国主義戦争」の「真の階級的性格」をあきらかにする必要があった。それには、「すべての交戦列強の支配階級の客観的立場の分析」、さらにさかのぼって、「ひとにぎりの『先進』諸国による地上人口の圧倒的多数の植民地的抑圧と金融的絞殺との世界的な体系」である、「全世界的な資本主義経済の概観図が、その国際的相互関係においてどのようなものであったか」をあきらかにしなければならなかった。

このようにして、かれには、『帝国主義論』において、「社会主義革命の前夜」である「帝国主義の基本的な経済的諸特質の連関と相互関係」を解明することがその「任務」としてあたえられた。

この「任務」をはたすためには、レーニンは、「すべての交戦列強と全世界の経済生活の基礎にかんする資料の総体をとりあげ」なければならなかった。そしてかれは、いわゆる「下向の旅」をつづけて、この「資料の総体」を分析することによって、帝国主義における経済生活のもっとも基礎的な「事実」である、金融資本の支配、さらには産業資本と銀行資本の各資本部門における独占にたどりついた。独占の實在という、このような「事実」は曲げようのないものであって、いやでもおうでも考慮にいれなければならないものであった。

その「事実のしめすところによれば」、「工業のおどろくべき成長と、ますます大規模な企業への生産の集中のいちじるしく急速な過程」ならびに「競争の独占への転化は最新の資本主義経済におけるもっとも重要な現象のひとつ」であるがゆえに、レーニンはマルクスがそうしたように、かれの眼の前にあたえられたこのようなもつ

とも基礎的な事実の分析からはじめる。

この分析によって、資本の自由競争にもとづく「集積は、その発展の一定の段階でおのずから、いわばびつたりと独占に接近する」ことがあきらかにされる。

最大限の利潤追求をその推進的動機とする資本の「自由競争は、大規模生産をつくりだし、小規模生産を駆逐し、大規模生産を巨大な規模の生産によっておきかえ、生産と資本の集積」集中過程を促進・助長する。その過程で中小資本を駆逐してそれらを吸収・合併・下請・系列化することによって成長した大資本や巨大資本は「生産の集積の発展の非常に高度の段階で」独占に転化する。そして、独占は、「全経済生活の基礎のひとつとなる」にいたる。

この「生産の集積の発展の一定の段階」とは、レーニンによれば、「数十の巨大企業にとっては相互のあいだで協定に達するのが容易」で、「競争を困難にするほど企業規模が大きい」という、そういう「独占への傾向を生み出す」ような段階のことである。

レーニンは、このようにして、産業資本部門における独占の实在という事実を分析して、これが独占にとつては「直接的な対立物」であるところの自由競争から必然的に転化したものであることをあきらかにした。また、それによって、「独占——これこそ『資本主義の発展における最新の局面』の最後の言葉である」こと、および「生産の集積による独占の発生」が、帝国主義の「一般的で基本的な法則である」こともあきらかにされる。

(1) 以下、特別のことわりのないかぎり、引用文は、B. И. Ленин, *Империализм, как высшая стадия капитализма*, Издательство Политической Литературы, Москва, 1965, 副島種典訳『帝国主義論』（国民文庫版）からのもの。ただし、原書の

訳文は、邦訳書の訳文とかならずしもおなじではない。

二

レーニンは、産業資本部門において「資本主義的自由競争に資本主義的独占がとってかわった」こと、すなわち、産業資本が独占的産業資本に転化したことを分析したあと、銀行資本部門における独占の分析にうつる。なぜならば、「独占の実際の力と意義についてのわれわれの理解は、もし銀行の役割を考慮にいれないならば、きわめて不充分で、不完全で、ちっぽけなものとなる」からである。

ここでも、かれは、「銀行資本の増加、巨大銀行の支店と出張所、それらの口座の数の増大その他にかんする資料」に代表されるところの「銀行業の集積」という独占の事実そのものから分析を出発させる。

その分析は、銀行資本部門でも、自由競争が独占をもたらさざるをえないことをあきらかにする。このことは、自由競争の独占への転化が、「単に産業資本の運動のみにかぎられるのではなくして、貸付資本の運動法則にも適用される」ことを意味する。そして、この「金融部面における集中化の必然性も、銀行間の競争を通じて実現される」⁽¹⁾。

銀行資本の自由競争による「資本の集積および取引の増加とともに、銀行の意義が根本から変化する。……何人かの資本家のために当座勘定を開設するときには、銀行はあたかも純粹に技術的で、もっぱら補助的な業務を遂行するかのようである。しかしこの業務が巨大な規模に成長すると、ひとにぎりの独占者たちが全資本主義社会の商工業業務を自己に従属させるようになる」⁽²⁾。

銀行資本の最大限利潤をもとめての自由競争によって、「銀行業が発展し、それが少数の銀行に集積されるにつれて、銀行は仲介者というひかえ目な役割から成長して、あらゆる資本家と小経営主のほとんどすべての貨幣資本や、さらにその国や一連の国内の生産手段と原料資源の大部分を自由にする全能の独占者に転化する」のである。

そして、銀行資本部門においても、「集積過程によって全資本主義経済の先頭に立つようになった少数の銀行のあいだで、当然のこととして、独占的協定と銀行トラストへの志向がますます多く認められ、ますます強まる」ようになる。

これらのことは、産業資本部門におけるとおなじように、銀行資本部門においても、その「集積の発展の一定の段階」で、自由競争が独占に転化せざるをえないことをあきらかにしている。

レーニンは、このようにして、銀行資本部門においてその眼前にあたえられている独占の分析にもとづいて、銀行資本が「多数のひかえめな仲介者からひとにぎりの独占者」へ転化し、独占的銀行資本にとってかわられたこと、したがって、「ここでもまた、銀行業の発展における最後の言葉は独占である」ことをあきらかにする。

*

*

*

レーニンは、産業資本部門と銀行資本部門における独占をそれぞれかれの眼前にあたえられた「曲げようのない事実」として前提し、これを徹底的に分析する。

最大限の利潤のかくとかをその規定的目的とする資本の自由競争によって実現された集積・集中はその一定の発展段階で必然的に独占をもたらす。

このように、資本主義の発展「過程で経済的に基本的なのは、資本主義的自由競争に資本主義的独占がとってかわった」ことである。

したがって、帝国主義における経済的に「基本的な特質」は、「資本主義的独占」でなければならぬ。

「独占が自由競争にとってかわったことが、帝国主義の根本的な経済的特徴であり、その本質である」⁽³⁾。

そして、産業資本部門と銀行資本部門における自由競争は、産業資本と銀行資本とを、それぞれ、独占的産業資本と独占的銀行資本に転化させる。すなわち「どのカルテル、トラスト、シンジケート、どの巨大銀行もすべて独占」⁽⁴⁾なのであり、「独占は、トラスト、シンジケートその他のなかにも巨大銀行のなかにも、原料資源の買占め、その他のなかにも、銀行資本の集中などのなかにもあらわれる」⁽⁵⁾のである。

いずれにしても重要なことは、「帝国主義とは独占資本主義」⁽⁶⁾のことであり、独占の支配が、帝国主義における「一般的で基本的な法則」であることを確認することである。

(1) 石井 学「銀行資本の集中化について」、『高崎経済大学論集』第一四号 九九一—一〇〇ページ]

(2) おなじことは、『帝国主義論ノート』でも指摘されている。

「どこでも量が質に転化する。純粋な銀行業務と限られた特殊な銀行業務が広範な、多くの大衆の、諸国民全体や全世界を包摂する相互関係と関連 (Zusammenhänge) とを——数十億ルーブル(数千ルーブルとはちがって) がそこにみちびき、それを必要とするというだけの理由で——顧慮しようとする試みに転化する」(B. И. Ленин, *Сочинения*, том 39, стр. 92-3, 『レーニン全集』第三九卷 八七一—八ページ)。

(3) B. И. Ленин, *Сочинения*, том 23, стр. 94, 『レーニン全集』第三卷一一二ページ。

(4) Там же, стр. 103, 同右, 一二二—一二三ページ。

(5) Там же, стр. 30-31, 同右, 三八—三九ページ。

(6) Tam ke, crp. 103, 同右, 一二二ページ。

三

かくして、帝国主義では、その「基本的特質」としての独占が産業資本と銀行資本のいずれの部門にもあらわれるのであるが、産業と銀行との、それぞれ固有の資本部門におけるそのような自由競争の独占への転化と、産業と銀行との相互作用にもとづく自由競争の独占への転化とは、現実の過程としてはきりはなしたがたくむすびついており、したがってそれらは同時並行的に進行する過程である。レーニンが、産業資本部門における独占の分析のなかで、「貨幣資本と銀行とは、ひとにぎりの巨大企業の優越をますます圧倒的なものにする」といって独占的銀行資本に言及しながら、これを「あとでみる」ことにしているのは、現実の過程が両者の相互作用をともなっていることを意味するものにほかならない。

ここから、後者、すなわち相互前提の関係にある産業と銀行との相互作用を前者からきりはなすことによつてこれを、別個に分析しなければならないという論理的な必然性が生じてくる。レーニンも実際にこのような論理的方法にしたがつて、「銀行の新しい役割」の分析にすすんでいく。

「銀行と産業とのあいだでの緊密なむすびつきについていえば、まさにこの領域で銀行の新しい役割がおそらくもつとも明瞭にあらわれる。銀行がある企業家の手形を割引し、かれのために当座勘定を開設するなどのばあいには、これらの操作は、個々のにとつてみれば、この企業家の自立性をいさかも縮小させないし、銀行は仲介者という、ひかえめな役割からはみでてはいない。しかしこれらの操作がしばしばくりかえされて恒

常的なものになってきて、銀行が自分の手に巨額の資本を『あつめる』ようになると、またもし、この企業の当座勘定の開設が、銀行に、その得意先の経済状態をますます詳しく、かつ完全に知らせることができるようになると、その結果として産業資本の銀行への従属がますますあきらかになる」。

銀行における産業資本の「当座勘定の開設」を通じての両者の相互作用によって、「銀行と巨大商工業企業とのいわば人的結合、すなわち株式の所有、銀行取締役の商工業企業監査役会あるいは取締役会への就任およびその逆とかの方法による両者の融合が發展する」。

レーニンは、産業資本と銀行資本との相互作用との分析にもとづき、「当座勘定の開設とその恒常化」、「株式所有」、「人的結合」などによって、投下された資本部門の区別をこえたところでの自由競争の独占への転化、したがって独占的産業資本と独占的銀行資本との融合、すなわち金融資本が形成されることをあきらかにする。

そして周知の命題、「生産の集積、そこから成長する独占、銀行と産業との融合あるいは癒着——これが金融資本の発生史であり、金融資本の概念の内容である」によって、金融資本とはいったいなにか、それはいかにして発生したか、を概念としてしめすのである。

かくして、レーニンは、徹底した分析という方法によって最初は表象としてしか思いうかべられていなかった金融資本を概念にまで加工するにいたる。

金融資本は、独占的産業資本と独占的銀行資本の融合体として、両者を同時に共通的に支配し、かつ両者を同時に内容としてもつ資本となる。⁽¹⁾したがって、金融資本による「もつともすんだ支配の形態……その一般的な基礎は、『利害共通』原理によって特色づけられる」。⁽²⁾かくして「独占資本主義の發展とともに、……銀行家と

産業家とのあいだの区別は銀行家と産業家とが一体化した銀行家＝産業家へと融合するにつれて、さらにあいまいなものとなる」⁽³⁾のである。⁽⁴⁾

(1) 古賀英正『支配集中論』（有斐閣）参照。氏は、「金融資本家は、本来銀行業者であることもあり、独占の大産業家であることもあり、したがって……その支配の基盤を主として銀行におくこともあり、独占産業体におくこともある。だがいずれにせよ、かれらはこの最高段階に到達した資本家としては、等しく金融資本家であり」（同右、一九〇ページ）、「いずれが主導性をとったかは、ただ沿革的な差にすぎず、成立したものは等しく金融資本である」（同右、八〇ページ）と正しく強調されるのであるが、ヒルファディングとおなじく、「かれ（レーニン——引用者）もまた、『金融資本は、産業家の独占団体と融合した少数の独占的な巨大銀行の銀行資本である』と述べ、究極においてこれを銀行資本と同一視し、少くとも特定発展段階にまで発展した銀行資本であるとみている」（同右、七五—六ページ）と指摘されている。

しかし、レーニンは他方では、「金融資本とは、銀行資本と融合した独占的産業資本である」（*Сочинения*, том 23, стр. 94, 『レーニン全集』第三卷一二二ページ）とも、「金融資本とは、独占にまで成長して銀行資本と融合した巨大産業資本である」（*там же*, стр. 35, 同右、四三—二ページ）とも語っているのであるから、レーニンが、金融資本を「（独占的）銀行資本」と規定しつづるとみるのは、さるか早計であらう。

(2) V. Perlo, *The Empire of High Finance*, International Publishers, New York, 1957, p. 42, 浅尾孝訳『最高の金融帝国』（合同出版）四九—一〇二頁。

(3) *Ibid.*, p. 46, 同右、五三—二頁。

(4) このことは、「革命的民主主義政府」が、「経済生活を規制」＝「統制」するときには、独占的産業資本と独占的銀行資本とを「同時に国有にする必要があることを意味する」。

「革命的民主主義的政府と名づけられる政府……そのもっとも主要な統制方策はこうである。

1) すべての銀行をひとつに統合し、その業務を国家に統制すること、すなわち銀行を国有にすること。

2) シンジケート、すなわち資本家の巨大独占団体（砂糖、石油、石炭、冶金などのシンジケート）を国有にすること……」（*Сочинения*, том 25, стр. 304-5, 『レーニン全集』第二五卷 三五四—二頁）。

「資本主義は国民経済のさまざまな部門のもっとも密接な結びつきと相互依存を生み出したという点で資本主義以前の古い

国民経済体制とちがっている。……銀行が生産を支配している現代資本主義は国民経済のさまざまな部門のこの相互依存を極度に高めた。銀行と商工業の重要な諸部門はきりはなせないように癒着してしまった。一方ではこのことは、商工業シンジケート（砂糖、石炭、鉄、石油その他のシンジケート）の国家独占をつくりあげる措置をとらないで、銀行だけを国有にする。ことはできないことを意味する。他方ではこのことは、経済生活の規制、これを本当に実行しようとするならば、銀行とシンジケートを同時に（однопаче）国有にする必要があることを意味する。（Там же, стр. 310-11, 同右、三六一ページ）。

四

帝国主義時代には、産業資本と銀行資本の各部門における独占形成と時をおなじくして、資本形態をこえたところで自由競争が独占に転化することによって、独占的産業資本と独占的銀行資本との融合が誰の目にもあきらかとなる。この両資本の融合体たる金融資本の支配が資本部門の区別さえあまいものにするとすれば、レーニンは『帝国主義論』においてなぜいきなり金融資本という概念の展開からはじめなかったのであろうか。

それは、わたしがいままでのべてきたように、レーニンには、産業と銀行のそれぞれの資本部門における独占の实在という下向の旅によって到達した事実の分析が資本概念の展開に先立ってどうしても不可欠の前提であったからである。だからかれは、金融資本概念を『帝国主義論』の論理展開の冒頭におくのではなく、産業資本と銀行資本におけるそれぞれの独占の形成という事実を表象に思いうかべてこれを分析することから出発したのである。⁽¹⁾

ところで、このような分析方法を不可避ならしめるところの現実的背景はいったいなにであろうか。

資本主義を支配している資本が、金融資本であろうと、あるいはそうでなかりと、その利潤の源泉となる剰

余価値が生産される部門は産業資本であるということには資本主義をつうじてかわりがないし、したがってそのことは資本主義に一般的なことである。

産業資本部門において最大限の利潤をもとめる資本の自由競争にもとづく集積・集中は、その投下資本量に平等に比例する平均利潤のかくとくを、それには比例しない独占利潤の独占的産業資本によるかくとくにとつてかわらしめる。かくして、産業資本部門で生産された剰余価値は、産業資本のなかで投下資本額には不均等に分配されてしまう。産業資本の独占的産業資本と非独占的産業資本への分裂が結果される。この資本への不均等な分配の源泉が、産業資本部門で生産される剰余価値であることが、産業独占をまず銀行独占から切りはなして徹底的に分析することを必然化たらしめるひとつの重要な根拠となっている。

産業資本とならんで最大限利潤を求める銀行資本の運動する銀行部門においても、平均利潤のかくとくを結果するところの銀行資本の自由競争はやはりその資本の集積・集中の発展の一定の段階で、銀行資本を独占的銀行資本と非独占的銀行資本とに分裂せしめるであろう。独占的銀行資本も、独占的産業資本とおなじく、その投下資本量には不均等な独占的超過利潤を確保するにいたる。しかし、銀行資本は産業資本とちがって、剰余価値を生み出すわけではなく、その取得を創造するにすぎないのであるから、銀行資本部門における自由競争の独占への転化は、産業資本部門におけるそれとは切りはなして別個に取り出すことによつて分析しなければならぬ。

したがってレーニンをして徹底的な分析方法を駆使せしめた現実の背景は、独占をその基本的特質とする金融資本の支配を保障するに足る独占利潤の源泉が、産業資本部門において生産される剰余価値にある、ということであろう。

(1) 『帝国主義論ノート』でみられるように、レーニンをはじめのうちは、論理展開の最初に金融資本あるいは銀行資本をおいて
いるが、かれはしだいに産業と銀行のそれぞれの資本部門における独占という事実の分析からはじめるようにプランを変更して
いることがわかる。

「帝国主義」

(一) 銀行資本 (二) 独占 (トラストなど) ……」(Сочинения, том 39, стр. 91, 『レーニン全集』第三九卷 八六ページ)。
「覚え書(金融資本一般についての) ……金融資本主義は、資本主義の非常に低い(未発達でおくれた)形態をとりのぞく
ものではなく、これらの形態から、それらのうえで成長する。 ……金融資本(独占、銀行、寡頭制、買取など)は資本主義の
偶然的ぜい肉ではなくて、資本主義の不可避的な継続であり、産物である」(там же, стр. 171-2, 同右、一五九—一六〇ペ
ージ)。

「帝国主義の問題によせて

テーマ(たとえば)

五、一、金融資本

四、二、銀行

二、三、カルテルとトラスト

三、 独占

一、四、集中と大生産」(там же, стр. 177, 同右一六五ページ)。

「たとえば、

一、生産の集中、独占、トラスト

二、銀行と金融資本……」(там же, стр. 218, 同右、二〇九ページ)。

「たとえば、

一、生産の集中と独占——

二、銀行——

三、「金融」資本(ならびに金融寡頭制) ……」(там же, стр. 219, 同右、二〇九—二一〇ページ)。

なお、林直道『原典解説・帝国主義論』(青木書店)一〇〇—一〇一ページを参照のこと。

『帝国主義論』の方法についての一考察(島津)

五

金融資本概念がかくとかされたあとは、帝国主義論は、この金融資本概念が展開される過程として体系づけられなければならないであろう。われわれは、帝国主義の諸事実を抽象してそのなかからもっとも簡単なカテゴリーである金融資本概念をわがものとした。ところが、帝国主義における「社会生活のすべての側面」での諸事実とこのもっとも抽象的なカテゴリーである金融資本とはまったく媒介されないままである。したがってわれわれには、どうしても、この「社会生活のすべての側面」での帝国主義的諸事象と抽象的な金融資本概念とを必然的連関において把握し、金融資本概念を展開しなければならないという必要性が生ずるのである。すなわち、われわれは、金融資本がその担い手となるところの「独占がいったん形成されて、幾十億の金を自由に動かすようになる」と、絶対的な不可避性をもって……どんな『特殊性』にもかかわりなく、社会生活のすべての側面に浸透していく」過程をあとづけなければならないわけである。

金融資本をしてこのような独占的支配にかりたてる推進的動機は、「まさに『独占利潤』である」⁽¹⁾。この金融資本の支配によってかくとかされる利潤は、産業資本部門で生産される剰余価値をその源泉としながら、資本部門にはかかわりなく、その投下資本量に不均等に帰属する独占的超過利潤のことである。それぞれの資本部門における独占形成と同時的に進行するところの産業資本と銀行資本との相互作用の分析は、融資、株式所有、人的結合などを通しての金融資本の発生をあきらかにする。この金融資本は、独占的産業資本と独占的銀行資本とが融合することによって資本部門の区別をこえてそれぞれの資本だけではえられなかった独占利潤をわがものとす

ることができるようになる。⁽²⁾ この独占利潤の搾取・収奪という推進的動機にもとづいて、金融資本は、「社会生活のすべての側面」においてその基本的特質としての「独占原理」を貫徹させようとする。

「金融資本は独占の時代をつくりだした。そして独占は、いたるところで独占原理をとまなう」。

まず、産業資本部門においては、「独占は、生産の集積の発展の非常に高度の段階で、生産の集積から生じた」。そして、「支配関係およびそれとむすびついた強制関係」によって、「少数の独占者たちのこりの住民にたいする抑圧は、いままでの百倍も重く、身にこたえ、耐えがたい」ものとなり、「独占に、その抑圧に、その専横に服従しないものが独占によって絞め殺される」という事態がわれわれのまえにあきらかにされる。

つぎに「独占は銀行から生じた」。すなわち銀行資本部門においても、「大銀行は、小銀行企業を直接吸収するばかりでなく、小企業を自己に『併合』し、それらを従属させる」こと⁽³⁾によって、「多数のひかえめな仲介者からひとにぎりの独占者」へ転化し、「経済生活全体を支配する」ようになる。

さらに、「少数者の手に集積されて、事実上の独占を享有している金融資本」は、参与制度、会社の創立、有価証券の発行、企業の安値買収・「整理・再建」、大都市の近郊での土地投機など、「現代ブルジョア社会の、例外なくすべての経済機関のうえに、従属関係の細かい網の目を張りめぐらす」こと⁽⁴⁾によって、「巨額の、しかもますます増大する利潤を引き出し、金融寡頭制支配を強化し、社会全体に独占者にたいする貢ぎ物を課している」。

金融資本はかくして、いたるところでその基本的特質としての「独占原理をとまない」ながら、その規定的目的である独占利潤の搾取・収奪機構を強化、拡大していく。したがって、金融資本が独占原理にもとづいて、

「支配関係およびそれとむすびついた強制関係」を貫徹させることによって「社会生活のすべての側面に浸透していく」過程の分析が同時に、金融資本概念の展開の過程ともならなければならないのである。

このようにして「資本主義の発展したすべての国における」金融資本の支配が一般化されたあとは、「金融資本がその網を世界のすべての国にはりめぐらす」過程の展開にうつらなければならないであろう。

まず、資本輸出においては、「有利な取引のために、『縁故』を利用することが公開市場での競争にとってかわる」。つまり、「借款の一部を債権国の生産物の購入に支出することを借款の条件とすることがもつとも普通のこととなる」のである。だから、「資本の輸出は、商品の輸出を促進する手段となる」。かくして、「まさに輸出の上昇は、金融資本の詐欺的な策略とむすびつく」。ここでも、金融資本には、「独占原理をとめない」ながら、「ほとんどいつもなんらかの『利益』をかくとくする可能性がえられる」。これもはや、「自由競争ではない」ことはあきらかであろう。すなわち、「帝国主義のばあい、……植民地投資ははじめから特権的な投資に基調をおいていた。つまり、利権もしくはなんらかの特権的な地位の認可というかたちでなんらかの差別的利益、優先権、もしくは事実上の独占をもった計画への投資に基調をおいていた」⁽⁵⁾のである。だからこそ、このような「独占原理をとまなう」ところの「帝国主義の『利益』」は「独占と金融資本についての問題にとって重要」⁽⁶⁾なのである。

そして「資本の輸出が増加する」にともなって、「全世界的な資本と生産の集積の新しい段階、先行のものはくらべものにならないほどの高い段階」である「集積の到達した段階が利潤かくとくのためにいやおうなく、金融資本をして世界の経済的分割という「道に立たせる」。

こうして金融資本は「不可避的に経済的領土の拡張」にかりたてられるのであるが、「さらには領土一般の拡張に努力することになる」。すなわち資本主義の自由競争段階では、「植民政策は、土地をいわば『はやいもの勝ち』に占取するというかたちで、非独占的に発展することができた。いいかえれば、「真の意味の植民地、すなわち自由な移民によって植民される処女地」および「奴隷制度の廃止によって事情がまったく変わってしまった古い栽培植民地」などの「未占取の土地」を自由競争によって「はやいもの勝ち」に「占取」することができたのである。そのころは、「まだ未開拓の投資分野があり、利権漁りが容易であるから手近に横たわっている機会をとらえたりあたらしい分野を開拓したりすることに主として注意が向けられ」た。とするならば、「排他的な領土」として地球を『分割』しようとするギャング的欲望はまだ処女地によってみだされていた」ところの、いわば「開拓の段階」であった。こうして、「資本が妨害されることなく、植民地をふやし、アフリカその他でまだ占取されていない土地を奪取することができたあいだは、自由貿易と平和的な競争とは、可能であったし、また必然的であった」⁽¹⁰⁾のである。⁽¹¹⁾しかし、「世界の経済的分割を基礎として」、「金融資本ときわめて密接にむすびついている植民政策は、「不可避的に植民地の独占的領有の、したがってまた世界の分割ならびに再分割のための、とくに激化した闘争」を必然化させる。「独占企業の発生と発展は、以前のような自由競争を不可能にし、その基盤をほりくずして、地球を分割してしまい」⁽¹²⁾、かくして、「独占への志向、投資領域、原料入手領域などを奪取しようとする志向が自由貿易と自由競争にとってかわった」⁽¹³⁾のである。

このようにして金融資本は、その前にあたえられた「客観的現実」⁽¹⁴⁾、すなわち「高度に発達した資本主義的民族とならんで、経済的にきわめてわずかしか発展していないか、まったく未発達の多くの民族が存在している」

という「抑圧民族と被抑圧民族への諸民族の分裂」⁽¹⁵⁾をも、その基本的特質である独占原理を貫徹させることによって独占利潤の搾取・収奪の対象とするのである。

以上、簡単にみてきたように、レーニン⁽¹⁶⁾は眼の前にあたえられた諸事実をそのまま率直にうけとり、それに一步一步と分析をくわえることによって、それらにはいずれも独占原理が貫徹していること、その担い手が金融資本であることをあきらかにする。かくして、はじめにわがものとされた抽象的な金融資本概念は上向過程におけるたえざる分析に媒介されて、しだいに具体化されていくのである。それがまた同時に金融資本の概念展開にもなっている。

こうして金融資本概念がよりいっそう展開されたところで帝国主義を具体化してみると、金融資本の支配とこの資本による世界の分割ということになるであろう。ここでの世界というのは、カウツキーがいうような「農業地域」⁽¹⁶⁾とか、ローザ・ルクセンブルグが強調するような「まだ押収されていない非資本制の世界環境の残りの部分」⁽¹⁷⁾ではなく、「もっとも工業的な地域」や、「植民地を領有し」て、「完全な政治的独立を享有している」帝国主義諸国をも包含した、文字通りの世界でなくてはならない。ここから、帝国主義時代においては、「一方では、少数者の手に集積されていて、さまざまな関係やむすびつきの、異常にひろく張りめぐらされている目の細かい網——中小資本家ばかりではなく、非常に小さな資本家や経営主までもそれに従属させている網——をつくりだしている巨大な規模の金融資本」が支配し、「他方では、他の民族的国家の金融家グループとの世界の分割をめぐっての尖鋭化した闘争」⁽¹⁸⁾がくりひろげられる。

したがって、「帝国主義とは一言でいえば、資本主義の独占段階であるが、かりに二言でいえば、『金融資本』

と『世界の分割』である、ということになる⁽¹⁹⁾。

- (1) 林 直道「帝国主義の五つの基本的標識」(『マルクス経済学体系』有斐閣 第三卷 一〇二ページ)。
 - (2) このことは、独占利潤の「基本的源泉」を特別に優秀な生産条件にもついで個別資本あるいは個別「企業」で「固定化された特別剰余価値」にもとめ(白杉庄一郎「独占理論の研究」ミネルヴァ書房)たり、収奪による「剰余価値の再分配」にもとめ(平瀬巳之吉「独占資本主義の経済理論」未来社)たりするのは、いずれも一面的であることをしめしている。
- 産業資本によって生産される剰余価値を独占利潤の実体的基礎とするかぎり、それは個別資本によって生産された剰余価値、あるいは流通 \parallel および分配を通じて収奪された他の個別資本の生産した剰余価値という形態で金融資本のもとに独占利潤として合流する。いずれが独占利潤の源泉の「基本的」形態であるかは、その金融資本がおかれている具体的条件に依存するであろう。したがって、われわれにとっては、独占利潤が金融資本の剰余価値生産過程、ならびにその流通 \parallel および分配過程のそれぞれにおいてどのような形態で金融資本によって搾取・収奪されるかを具体的条件においてあきらかにしていくことが重要であるように思われる。

- (3) *Сочинения*, том 23, стр. 94-5, 『レーニン全集』第三卷 一一二ページ。
 - (4) *Сочинения*, том 39, стр. 81, 『レーニン全集』第三九卷 七十七ページ。
 - (5) M. Dobb, *Political Economy and Capitalism*, Routledge & Kegan Paul Ltd, London, 1937, p. 230—231, 岡稔訳『政治経済学と資本主義』(岩波書店)二二二ページ。
 - (6) *Сочинения*, том 39, стр. 66, 『レーニン全集』第三九卷 六二二ページ。
 - (7) K. Marx, *Das Kapital*, Dietz Verlag, Berlin, 1961, Bd. I, S. 804, 長谷部文雄訳『資本論』(青木書店)第一卷 一一六二ページ。
- なお、J. A. ホブソンはこのような「植民地」を、「民族の真の拡張」によって「移住」される「自治植民地」と規定して²⁰⁾。
- 「植民主義は、もし民族の一部が住民のまったくいないか、ほとんどいない外地へ移住するものであり、移住民が母国におけるすべての市民権をたずさえていくか、あるいは母国の制度に厳密にしたがい、かつ母国の終局的支配のもとで地方自治を確立するときには、民族の真の拡張、すなわち民族の血統、言語ならびに制度の地域的拡大と考えられてよいであろう(J. A. Hob-

『帝国主義論』の方法についての一考察(島津)

-son, *Imperialism*, George Allen & Union Ltd, 1938, p. 6, 矢内原忠雄訳『帝國主義論(上)』岩波文庫版 四四ページ)。
 かくして、「着実に一貫した自治の拡大と本国政府によって行使される監督のかたちにおける帝国の漸次的緩和」(ibid., p. 328—9, 『帝國主義論(下)』二六二ページ)によって「オーストラレーシア、北アメリカおよび南アフリカにおいてイギリス憲法を簡単にした型を賦与された一七の自治植民地が建設された。オーストラレーシアとカナダのばあいにおいては、自治の成長は形式的にも実質的にも、連邦条例によって促進せしめられた」(ibid., p. 329, 同右, 二六二ページ)。したがって「あきらかに民族主義の拡張とみなしうる遠隔植民地の唯一の形態は、オーストラレーシアとカナダにおけるイギリスの自治植民地である」(ibid., p. 6, 『帝國主義論(上)』四五ページ)。

(8) *Political Economy and Capitalism*, p. 237, 『政治経済学と資本主義』二二八—九ページ。

(9) *Ibid.*, p. 237, 同右, 二二九ページ。

(10) *Сочинения*, том 21, стр. 201, 『ハーニン全集』第二卷 二二二—三ページ。

(11) したがって、「自由貿易の説(によると——引用者)……門戸を閉じるにまかせ、より間接的ではあるが、等しく確実な迂回貿易の方法によって、われわれの利益を得るほうがより有利である。現在イギリスは(植民地的膨脹を——引用者)ひかえるこの政策を実施するに他のどの国民よりも強力な地位を占めている……われわれは、西洋の工業諸国の全般的貿易のためにあたりしい地域を開発するという、高価で、骨の折れる、そして危険な仕事のわれわれの分担、いなそれ以上を果した。われわれの最近の冒険は、われわれにとって以前のそれよりも高価であり、しかも利益はすくなかった。これ以上の膨脹の努力は、物的および知的な資本のより大なる支出にたいして貿易のより小さく、かつ不確定な増加をもたらすものであるから、収獲逡減の法則に該当するものと思われた」(*Imperialism*, p. 68—9, 『帝國主義論(上)』二二二—三ページ)。

このような植民地統治とその維持・管理の困難から、「イギリスで自由競争がもつとも繁栄した時代、一八四〇—一八六〇年代には、この国の指導的なブルジョア政治家たちは植民政策に反対し、植民地の解放、そのイギリスからの完全な分離を不可避で有益なことと考えていた」くらいである。

(12) *Сочинения*, том 21, стр. 201, 『ハーニン全集』第二卷 二二三—四ページ。

(13) Там же, стр. 273, 同右, 三〇七ページ。

(14) *Сочинения*, том 23, стр. 48, 『ハーニン全集』第三卷 五九—六ページ。

- (15) *Сочения*, том 22, стр. 136, 『レーニン全集』第三卷 一七〇ページ。
 (16) *Die Neue Zeit*, " 1914, 2 (Ba. 32), S. 909, см. *Сочения*, том 39, стр. 242, 『レーニン全集』第三九卷 一三四ページ参照。
 (17) R. Luxemburg, *Die Akkumulation des Kapitals*, Vereinigung Internationaler Verlags-Anstalten G. M. B. H., Berlin, 1923, S. 361, 長谷部文雄訳『資本蓄積論(下)』(青木文庫版)五四一ページ。
 (18) レーニンによるおなじような指摘については *См. Сочения*, том 21, стр. 203, 273, том 24, стр. 431 и т. п., 『レーニン全集』第二卷 二二五、三〇七ページ、第二四卷 四九七ページその他を参照。
 (19) 林、前掲論文(前掲書一〇一ページ)

六

わたしは、以上の考察でほぼあきらかにしたように、帝国主義論の体系は、金融資本概念の展開として、すなわちもつとも抽象的なカテゴリーである金融資本概念を、思いうかべられている表象にたいして展開の一步ごとに分析をくわえることによってしだいに具体化していく過程として把握しなければならない、と考えるのであるが、これにたいして南克己氏は、「帝国主義論は、金融資本ではなく、それと区別された『独占』概念の論理必然的展開として体系化されなければならない」と主張される。

氏によれば、『資本論』から、レーニンの『帝国主義論』への発展をもつばらその方法的理論的な側面から検討すると、「レーニンのえた第一次的な帰結」であるところの『独占』こそ……この(帝国主義——引用者)時代のすべての主要な内容、主要な特質、主要な傾向などをその根底において規定する帝国主義の『経済的基礎』『本質』である」から、『独占』概念の基礎は、かくして『生産の集積』、それによる独占体の成立のうち

に設定されねばならない。いいかえれば、金融資本ではなく、『生産の集積』―産業独占体が、『独占』概念の、したがってまた『帝国主義論』の全展開の基礎をなす」ということでなければならぬ、と強調されたうえ、氏は、「この『生産の集積』なる、段階のこの基礎範疇のうちには、すでに帝国主義の一切が含蓄されており、したがって帝国主義の具体的な分析は、この基礎範疇の論理必然的な展開として体系化され、かくして、『資本一般』概念の展開でみられたマルクスの方法の再現を、われわれはいまやレーニンによる『独占』概念のうちに追求しうる」と結論される⁽¹⁾。

ここでわたしが問題としたのは、『帝国主義論』がはたして、『独占』概念の論理必然的展開として体系化され」ているかどうか、ということである。

氏は、「レーニンがまずあたえられた帝国主義の現実の分析から出発し⁽²⁾て、『競争から』独占』転化の分析を、さしあたり『資本』銀行の集積』から分離して、『生産の集積』と産業独占体の成立⁽³⁾を、『第一次的帰結』⁽⁴⁾として導きだした、とされる。氏は、このレーニンの分析方法の根拠として、『資本論』で、資本一般の基礎が剰余価値生産―搾取関係として確立されたことを想起⁽⁵⁾」される。

詳しい考察はべつの機会にゆずらなければならないが、『資本論』における資本概念の展開のはじめにあえられた資本範疇は、そのなかに、商業資本ならびに利子つき資本を兼ねそなえたところ、論理的にもっとも抽象的な産業資本である。資本の概念展開につれて、この産業資本が商業資本と利子つき資本をつぎつぎと分離させつつ、それらを自己に従属させていく過程が分析される。表象に思いかべられていた商業資本と利子つき資本という具体的な事実にたいする分析にもとづいた展開によってそれまでは抽象的であった資本の一般概念はしだ

いに特殊化され、具体化されていくのである。

このようにしてわがものとされた資本概念にふくまれる産業資本と銀行資本とが分離して同時に併存しているという事実が『帝國主義論』にとつての論理的な出発点として想定されるのである。

そのような前提にもとづいて産業資本、銀行資本の各部門における、さらには両者の相互作用によつて資本形態の区別にかかわりないところでの自由競争の独占への転化が分析されて、その結果金融資本概念がかくとくされる。したがつて、「さしあたり、『資本』銀行の集積」から分離して、『生産の集積』と産業独占体の成立」を「まず把握」⁽⁶⁾たあとは、「資本』銀行の集積』銀行独占体の成立」が「生産の集積』と産業独占体の成立」から「分離」されて、それ自体が分析の対象とされなければならないはずである。ところが氏は、「信用』株式制度などにかんする一般規定……は『生産の集積』のうちですでに前提されている」⁽⁷⁾したがつてまた「『生産の集積』なる、段階のこの基礎範疇のうちにはすでに帝國主義の一切が含蓄されている」ということから、『帝國主義論』を、その「全展開の基礎をなす」ところの「『独占』概念の論理必然的な展開」として「把握」しなければならぬ、とされるのである。

金融資本のかくたくする独占利潤の源泉が、産業資本部門において生産される剰余価値のほかのなにもでもない、というかぎりでは金融資本の支配の「基礎」が「『生産の集積』』産業独占体」であることはたしかである。しかしそのことと、『生産の集積』のうちに帝國主義の一切が含蓄されている」ということはおのずから別個のことからでなければならぬ。

われわれの眼前にあたえられたところの、帝國主義における経済生活のもっとも基礎的な事実である産業資本

と銀行資本のそれぞれの部門における独占、ならびに両者の相互作用の分析にもとづいて金融資本概念がかくとくされたあとは、帝国主義論の体系はこの金融資本が展開される過程として位置づけられなければならない。もちろん、このことは、その展開過程が分析を不必要にするのかといえ、けっしてそうではなく、その逆で、表象として思いうかべられているところの、「社会生活のすべての側面」における独占の諸形態の分析にもとづいて、それらがけっして偶然にあらわれるものではなく、金融資本がどうしてもそうした形態をとらざるをえないことを金融資本概念で説明することによって表象をたえず概念にかえていくのである。

その意味からいって、南氏の表現を借りるとすればむしろ「独占概念」ではなく、「金融資本の概念のなかにこそすでに帝国主義の一切が含蓄されている」というべきであろう。それにもかかわらず、氏は、「独占概念」から「帝国主義の一切」を説明しようとしたわけである。したがって氏が「『独占』概念の展開が……帝国主義の『具体的総体』の分析の排除と同じでない」とはいわれても、結果的には、氏のような「やり方」ではどうしても、表象を思いうかべながらそれを具体的に分析して上向していくのではなく、「概念の自己展開と⁽⁹⁾いったやり方」に陥らざるをえないように思われる。

このことは、帝国主義の基本的特質としての独占原理とその担い手である金融資本とを区別したうえで金融資本は独占原理を、「社会生活のすべての側面」に貫徹させながら、独占利潤の搾取と収奪をめざしてその支配と世界の分割を必然化させる過程の分析がどうしても必要になることをしめしている。

「独占」こそは、帝国主義を資本主義一般と明確に区別する基本的な原理である。この原理——独占——は……生産の集積を基礎として発生することが示され……さらに……銀行と産業の癒着として成立することが示

された。……独占の原理がたんに『金融資本』のみならず、『世界の分割』をもつらぬく……

この原理(独占)を体現した経済的主体、すなわち帝国主義の担い手は何であろうか。いうまでもなく『金融資本』がそれである。……金融資本をして、こうした一国内の独占的支配、および世界の分割支配にかりたてた原動力は何であろうか。『独占利潤』がそれである。⁽¹¹⁾

本間要一郎氏は、「南氏の『概念的構成』の体系においては、『独占』を帝国主義の本質として規定することをもって『独占』をそのもっとも抽象的な次元で規定することだとみなしている」のだから、「このような『独占』こそ、むしろ抽象的な概念だというべきであろう」と批判される。⁽¹²⁾

氏によると、「ここでは帝国主義の本質規定が問題なのであって、独占の概念規定が問題なのではない」⁽¹³⁾。そして『独占』こそ、帝国主義の基礎範疇であった。……この基礎範疇は具体的な諸形態をもって発現しなければならぬし、基本原理は具体的な諸現象のなかに普遍的に貫徹しなければならない。その発現と貫徹を通して基礎であり、原理であることが論証される。……『基本的標識』は、いずれも独占が自由競争にとつてかわつたという『帝国主義の本質』の現象形態なのである。⁽¹⁴⁾ したがって「むしろある意味では、本質こそもっとも具体的なものである」⁽¹⁵⁾。

たしかに、レーニンも「帝国主義の本質が問題である」とときには、産業資本、銀行資本の各部門や、金融資本、世界の分割における独占を帝国主義の「経済的本質」の「主要な現象」として位置づけているのであるが、氏が指摘されるように、このばあいの「本質と現象との関係は、抽象と具体の関係とはちが」⁽¹⁶⁾うであろう。

本質、あるいは実体がさまざまな現象形態をとることがあきらかにされたあとは、その実体をしてこれらの現

象形態をとらせざるをえないようにしたものはなにか、という認識段階にすまねばならない。

それには、実体をば、運動し、過程しつある実体、すなわち主体として把握し、それを抽象的カテゴリーから具体的カテゴリーにいたる上向過程に於じて概念的にしだいに具体化させて把握するという認識方法がどうしても必要となる。そのばあいわたしは、『帝国主義論』の展開の基礎は、南氏がいわれるように、「独占」ではなく、金融資本にもとめられなければならないし、帝国主義論は、この金融資本概念の「論理必然的展開」として体系づけられなければならない、と考えるのであるが、本間氏が、他方で、「独占の形成」という一点を基軸にして⁽¹⁷⁾、『独占』の支配が普遍的な原理として確立され⁽¹⁸⁾るときに、「現実の資本主義の新しい諸現象が一つのもとまりをもった体系として理論的に説明され⁽¹⁹⁾る、といわれるかぎりでは、氏の方法と氏が批判の対象とされる南氏の方法とのあいだには本質的な差異はないように思われる。

- (1) 以上、南克巳『資本論』体系の発展としての『帝国主義論』（『マルクス経済学体系（第三卷）』有斐閣所収）
- (2) 南、同右論文（同右、三〇ページ）
- (3) 南、（同右、三八—九ページ）
- (4) 南、（同右、三二ページ）
- (5)(6)(7) 南、（同右、三九ページ）
- (8)(9) 南、（同右、四八ページ）
- (10) 南氏は、「独占（体）」と「その担い手たる金融資本」とを「区別」されたうえで、『独占』概念の論理必然的展開」をされる。『独占』というばあい……直接的には資本主義的競争と対応する一般的な概念として一個の基本的な経済関係を意味し、したがってその個々の具体的な担い手たる『独占体』（産業独占体であれ銀行独占体であれ、両者の融合としての金融資本であれ）とも、その種々の『現象形態』とも一応は区別されている」（南、同右、三四ページ）。
- (11) 林、前掲論文（前掲書一〇一ページ）

- (12) 以上、本間要一郎『帝國主義論』における「独占」の概念」(『思想』五一五号に所収)
- (13) 本間、(同右、一三六ページ)
- (14) 本間、(同右、一三五ページ)
- (15)(16) 本間、(同右、一三六ページ)
- (17)(18)(19) 本間要一郎『資本論』と『帝國主義論』(『經濟評論』第一六卷第一二号 三八ページ)

七

金融資本概念を展開させるばあいに、それにたいしてもっとも大きな障害のひとつとなるのが、いわゆる「巨大な規模に達した資本の分離」ということである。金融資本とは、一方では、独占的産業資本と独占的銀行資本との融合、あるいは癒着のことであり、他方では、「帝國主義、あるいは金融資本の支配とは、この分離(資本主義一般に固有)である」「資本の所有と資本の生産への投下との分離、貨幣資本と産業資本あるいは生産資本との分離」——引用者)が巨大な規模に達している、資本主義の最高の段階のことである」。

この二つの金融資本規定が表面的にみるとたがい真向から相反したものであるがゆえに、独占的産業資本と独占的銀行資本との融合体という金融資本概念を否定して、「巨大な規模に達した資本の分離」論を根拠に、金融資本というのは、一方では独占的銀行資本のことであり、他方では独占的産業資本のことであり、といういずれにしても金融資本概念を展開しようとしなない一面的な考え方が生まれてくる。

この金融資本における「資本の融合」と「資本の分離」との相互関係を検討することは、帝國主義論体系における展開と分析とをよりよく理解するうえにもきわめて重要なことだと思われる。

ヒルファードイニングは、独占的銀行資本を金融資本と規定する。⁽¹⁾

「産業資本に転化されている銀行資本、したがって貨幣形態における資本をわたしは金融資本と名づける。

……すなわち銀行によって支配され、産業資本家によって充用される資本である」。⁽²⁾

このヒルファードイニングの「金融資本＝産業を支配する銀行資本」という金融資本＝独占的銀行資本規定では、「金融資本＝銀行資本」で十分ではないか？⁽³⁾ということになるざるをえない。しかし、それだけでは、「金融資本とはたんなる産業資本でも、たんなる銀行資本、貸付資本でもない。それは産業独占体と銀行独占体の癒着物として、『他のすべての形態の資本に優越する』ものであり、マルクスの時代に全く存在しなかった完全に帝國主義時代に固有のカテゴリーである」⁽⁴⁾ことがあきらかにされないままであろう。つまり、ヒルファードイニングの金融資本規定は、『資本論』において具体化された資本の一般概念にとどまっており、そこからのさらなる展開がなされないままになっているのである。

スウィーージーは、「ヒルファードイニングの分析」は、「産業資本と銀行資本との提携において支配的地位を占めるのは後者であるということをもいつも暗黙の前提としている」点を批判しつつ、レーニンの金融資本規定を、「独占資本」によって「おきかえる」よう提案する。つまりかれは、金融資本を独占的産業資本と規定しようというわけである。

スウィーージーによると、「この（独占資本主義——引用者）段階に達すると……銀行の力の最初の基礎となっていた新証券の発行機能は従来（競争的資本主義から独占資本主義への過渡期——引用者）ほど重要でなくなる。……追加的資本が（株式会社）の——引用者）内部で確保できるようになるとともに……かつては栄光の日をもった銀

行資本はふたたび産業資本にたいする補助的な地位にたちもどる⁽⁵⁾。むしろ、「少数の上層部大資本家たち……の拠点は産業資本であつて、ヒルファーディングが考えたように、銀行資本ではない⁽⁶⁾」。したがつて、「(レーニンの——引用者)『金融資本』という用語から、ヒルファーディングがそれにあたえたような銀行家の支配という内容をとりぞぎうるかどうかには疑問の余地がある。そうである以上は、この用語をつかうことはまったくやめてそのかわりに『独占資本』という用語でおきかえるほうが適當であるように思われる⁽⁶⁾」。

スウィージーはこうして金融資本概念を展開するのではなく、逆にそれをあつさりとは投げ捨てることによつてレーニンの金融資本規定を否定してしまうのであるが、かれがそうしたのもけつして偶然ではない。というのは、スウィージーが、経済学の分析方法は、いわゆる「段階的接近法」(successive approximations)でなければならぬ、と主張しているからである。

かれによると、「段階的接近法」とは、「より抽象的なものからより具体的なものへ一歩一歩近づいていくという方法であつて、研究の相つづく諸段階において単純化の仮説をとり去り (remove simplifying assumptions) かくして理論がたえずますます広い範囲で現実の諸現象を考慮にいれて、説明することができるようにする」方法である⁽⁷⁾。

スウィージーは、「抽象的なものから具体的なものへ一歩一歩近づいていく」独占資本主義「研究の相つづく諸段階において」も、「ますます広い範囲で現実の諸現象を考慮にいれ⁽⁸⁾」ることによつて、以前おなじかれ自身が規定した「大会社が、共通の支配、利益集団または何らかのつながりによつて結合している」という金融資本の「単純化の仮説をとり去り」、それを「独占(的産業)資本におきかえ⁽⁸⁾」てしまつたのである。このスウィージ

一の金融資本に独占的産業資本という規定は、V・パロによって厳しい批判にさらされた。パロは、アメリカ金融資本についての綿密な実証的分析にもとづいて、スウィージーが「没落した」とみなした投資銀行はじめ、商業銀行、銀行信託部と信託会社、生命保険会社、投資信託、火災損害保険会社、財団および大学寄付基金、法律事務所、相互貯蓄銀行、同族持株会社などの「蜘蛛の巣」を通じて、⁽⁹⁾「総体においては、大金融と大産業とのあいだの関係はかつてよりいっそう緊密になった」と結論づけている。⁽¹⁰⁾

スウィージーがあげているところの「もつとも有力な利益集団のひとつと一般に認められてきたもの、すなわちロックフェラー・グループに影響をあたえたばあいの、分解過程のひとつの特殊な実例」⁽¹²⁾によると、「スタンダード系の諸会社は、他のスタンダード系の諸会社と提携したり、闘争したりするのとおなじように、スタンダード以外の諸会社とすすんで提携したり、闘争したりする」⁽¹³⁾。

たしかに、「スタンダード石油の隊列のなかで、ときおり分裂の生ずることもあった。しかし、スタンダード石油や、銀行および産業企業……などにおける継続的な利害共通は、これらの諸家族やかれらの企業をロックフェラー帝国の圏内にあるものとして確立した」⁽¹⁴⁾のである。また、「もはや銀行家を必要としない真に大きな産業巨人」⁽¹⁵⁾として、「よくひかれる例」⁽¹⁶⁾であるジェネラル・モーターズほど、投資、人的結合、新規証券発行を通じて、「大きく指導的金融利権に債務を負った会社はなかった」⁽¹⁶⁾。したがって、「その勢力にもかかわらず、ジェネラル・モーターズは、金融資本の独立した中心とみなすことはできないのであって、さらに大きなモルガン帝国とデュポン帝国の主要な一部とみられるにすぎない」⁽¹⁶⁾のである。

したがって、スウィージーが考えるように、「理論」が「現実の諸現象を考慮にいれる」ことは、「より抽象

的なもの」である「単純化の仮説をとり去る」ことではないだろう。むしろ逆に、「抽象的なもの」は、それと一見矛盾するような「現実の諸現象を考慮にいれる」ことによって、「具体的なものに一步一歩近づいていかなければならない。その意味では、抽象的カテゴリーから具体的カテゴリーへ向上していく「段階的接近法」は、「単純化の仮説をとり去る」のではなく、それまでの概念と、それとは矛盾するようにみえる「現実の諸現象」とのあいだに必然的な関係を見出すことによって、金融資本というはじめの「単純化の仮説」をしだいに具体化していく方法でなくてはならない。ところがスウィージーは、「現実の諸現象」に目をうばわれてしまったために、「抽象的な」金融資本概念を否定することによって、それを展開する道をみずから防いでしまったのである。

以上の検討からあきらかなように、「生産の集積、そこから成長してくる独占、銀行と産業との融合あるいは癒着」、これがまさに金融資本の概念なのであるが、そのことはなにも、「貨幣資本と産業資本との分離が巨大な規模に達する」ことを排除しないどころか、むしろそれをひとつの契機として金融資本概念のなかに包摂しなければならないのである。後者の、「巨大な規模に達している貨幣資本と産業資本との分離」についての規定は、独占的産業資本のかくどくする独占利潤が、それと融合している独占的銀行資本のもとに「貨幣資本」として集中・預託され、融資、株式所有、人的結合を通じて融合している金融資本の直接的・間接的な利害の追求のために独占的銀行資本によって管理・運用されていることをいったものである。⁽¹⁶⁾

(1) もちろん、かれは金融資本の定義のなかでは銀行資本の「独占的」たることにふれてはいないが、『金融資本論』第一章において、銀行資本が産業資本間の競争を排除して、独占を確立させようとするところの「銀行の努力」について言及している。

(2) R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, Verlag der Wiener Volksbuchhandlung, Wien, 1923, S. 283, 岡崎次郎訳『金融資本論(中)』(岩波文庫版) 九七ページ。

- (3) Сочинения, том 39, стр. 313, 『バーニン全集』第三九巻 三〇七ページ。
 - (4) 林、前掲論文（前掲書一〇二ページ）
 - (5) P. M. Sweezy, *The Theory of Capitalist Development*, Dennis Dobson Limited, London, 1949, p. 267—8, 都留重人訳『資本主義発展の理論』（新評論 三二九ページ）。
 - (6) *Ibid.*, p. 269, 同右、三三二ページ。
なお、おなじことは『*The Present as History*, 1953, Ch. 13, 都留重人監訳『歴史としての現代』（岩波書店）第三章「投資銀行家の没落」でも強調されている。
 - (7) *Ibid.*, p. 11, 同右、一二二ページ。
 - (8) 『歴史としての現代』一八二ページ。
 - (9) *The Empire of High Finance*, Ch. 4, 『最高の金融帝国』第四章「蜘蛛の巣」
 - (10) *Ibid.*, p. 27, 同右、二九二ページ。
 - (11) V. パーロの事実にもとづく説得的な批判にたいして、スウィージーは依然として耳を傾けようとしていないことは、P. バランとの共著『独占資本』においてもつきのように述べていることからあきらかである。
「それぞれの株式会社は、経営者の意のままになるような資金の内部調達によって、金融的独立を目指し、普通は、これを達成する。株式会社は、政策の問題としては、いまなお金融機関から、あるいはそれを通じて借入するかもしれない。しかし、株式会社は、いつもそのように借入することを余儀なくされることはない。したがって株式会社は、五〇年前には大企業の世界ではきわめてありふれたことであった、金融的支配力にたいする従属関係を避けることができる……
……投資銀行業者の力は創設当時とか、最初の成長段階の初期とかにおける株式会社の外部金融にたいする緊急の必要がその基礎となっていた。その後、独占利潤のゆたかな収獲をかりとった巨大会社が、内部的に調達された資金によって、資金需要をまかなうことができることに気づくにつれて、このような必要は重要でなくなり、あるいはまったく消滅した。……かくして、かなり大きな株式会社は、しだいに銀行業者からも、支配的株主からますます独立するようになった」(P. Baran and P. Sweezy, *Monopoly Capital, the Monthly Review Press*, 1966, p. 29—30, 小原敬士訳『独占資本』岩波書店 二二—四二ページ)。
- おなじことは、「帝国主義論ノート」でもふりかえられてゐる (Notes on the Theory of Imperialism, Monthly Review,

March 1966, 相川欣也訳「帝国主義論ノート」『世界経済評論』第一〇卷第八号)。

(12) *Monopoly Capital*, p. 31, 『独占資本』二四ページ。

(13) *Ibid.*, p. 33, 同右、二七ページ。

(14) *The Empire of High Finance*, p. 166, 『最高の金融帝国』二〇二ページ。

(15) *Ibid.*, p. 27—30, 同右、二九—三四ページ。

(16) 「産業と銀行との融合・癒着関係は自己金融が発展して銀行が産業への融資を減退させる様な状態においても、産業より銀行への預託(産業にたいする運転資金の貸出の反映としての預託を含む)を通じて継続し」(小牧聖徳「金融資本にかんする一考察」『立命館経済学』第一二巻第四号 一八ページ)、かくして、「金融資本は銀行資本より産業資本への金融(投資・融資)のみでなく、産業資本より銀行資本への金融(投資・預託)をも含み、これら両者の交流的な金融過程のなかで、産業は銀行を、銀行は産業をより一層拡大発展させ、一体となって国内市場を支配する」(小牧聖徳「金融資本の検討(下)」『立命館経済学』第一三巻第五号 六四ページ)。